

原 著

ミルトンにおける死 (2)

—— *On the Death of a Fair Infant* を中心に ——

武 村 早 苗

川崎医療福祉大学 医療福祉学部 医療福祉学科

(平成7年4月19日受理)

Death in Milton (2)

—— Death described in *Fair Infant* ——

Sanae TAKEMURA

*Department of Medical Social Work
Faculty of Medical Welfare
Kawasaki University of Medical Welfare
Kurashiki, 701-01, Japan
(Accepted Apr. 19, 1995)*

Key words : Anne, death, classical images, Christian images

Abstract

When he was nineteen, John Milton wrote a poem to mourn the death of his little niece, Anne. This is his first original poem written in English. I am going to examine how Milton described Death and also to discuss the images in the poem, *Fair Infant*. He illustrated heaven more deeply in *Fair Infant* than in his Latin Poems.

要 約

ミルトンは19歳のときに、彼の小さな姪、Anneの死を悼んで「咳が原因で亡くなった美しい幼な子の死によせて」を創作した。これは彼が英語で書いた最初の詩である。この追悼詩の中で「死」がどのように描かれているか、また、いかなるイメージが用いられているかを考察した。その結果、「美しい幼な子」における天国の方が、ラテン語の追悼詩におけるそれよりも、複雑な機能を持った場所として描かれていると言える。

「咳が原因で亡くなった美しい幼な子の死に *of a Cough*)¹⁾
よせて」(*On the Death of a Fair Infant Dying*

1

咲くやいなや枯らされた、いと美しき花よ、
 季節はずれに萎れゆく、絹のような桜草。
 汝は夏の栄光となったであろうに、もし汝が、
 汝を枯らした冬将軍よりも長持ちしたならば、
 というのは、汝の頬を紅にそめた愛らしい色に、
 冬神が恋して、キスするつもりが、死なせて
 しまって、
 彼の致命的な愛のしるしを嘆いているのだ。

2

というのも、冬神の馭者、いかめしい^{アッロ}北風が、
 アテネの乙女オレイシアを略奪したので、
 もし同様に、誰か美しい女性^{ひと}と結婚しなければ、
 神としての沽券にかかわると思ったのだ。
 そうすれば、長い間の独り寝と子供のない老齢
 という、
 不名誉な汚名をぬぐい去ることにもなる。
 浮気な神々の間では、それが非難の的になって
 いた。

3

それゆえ、氷の真珠の馬車に乗り、
 凍てつく大気の中空を、長い間、冬はさまよい、
 ついには遠くから汝を見つけ、
 彼の追求は終って、心配も消えた。
 ふわふわ雪の馬車から彼は降りた。
 だが、不用心にも、優しく冷たい抱擁によっ
 て、
 汝の乙女の魂を、その美しい住処から追いだし
 た。

4

汝は亡くなったけれども、不名誉ではない。
 かつてアポロもそのように、結果がわからずに
 手をかけて、愛した友を死なせたのだから。
 エウロアスの岸辺で生まれた若いヒアシンサ
 スを。
 スパルタの誇りでもあった、若いヒアシンサ
 スを。
 だが、そのとき、彼を紫の花に変身させた。
 あゝ情けない、汝をそのように変える力が冬に

はなかった。

5

しかし、私には信じられない、汝が死んだとは、
 汝の亡骸が暗い土の中で腐ることも。
 深く掘られた墓の中で、世の中から隠されて、
 汝の美しさが蛆虫の床に横たわることも。
 憐れむ神^{アッ}は汝にそれほど酷い運命を負わせるだ
 ろうか。

そんなことはありえない。なぜなら汝の顔に
 汝の神性を示す。不滅のものが輝いていたから
 だ。

6

明らかにせよ、確実に祝福された魂よ。
 (これらの嘆きの言葉が聞えるならば、)
 教えてくれ、輝ける霊よ、どこの空で
 舞っているのか。あの最高天の上であろうか。
 あるいは至福の地であろうか。(そんな所がある
 ならば)

真実を教えてくれ、汝は人間であったのか。
 なぜわれらから、かくも早く飛び去ったのか。

7

揺れるオリンパスの、こわれた屋根から
 不運にも落ちた星が、汝であったのか。
 注意深いジュピターが、自然の^{まこと}真実のために
 その星を拾い、正しい場所へ戻したのか。
 あるいは最近、大地の子らが、輝く天の城壁を
 包囲したのか。汝は神々しい頭を隠すために
 下界に逃げてきた女神であったのか。

8

それとも汝は、かつて一度、いまわしい
 この世を捨て、おゝ真実を語っておくれ、
 再び下界を訪れた正義の女神であったのか。
 あるいは、優しくほゝえむ若い「恵み」であっ
 たのか。
 あるいは、冠をつけた婦人、聡明な白い衣の
 真理であったのか。

あるいは、天上の仲間の誰かが、下界の役に
 たつために、雲の玉座に乗って降りてきたのか。

9

それとも、汝は黄金の翼もつ天使であったのか。人間という衣に身をつつみ、前もって定められた住居^{すみか}から、地上に急ぎ、短い滞在ののち、速やかに飛び去った。あたかも天国がどんな者を生むかを示そうとするように。

そうすることで、人間の心に火をつけて、卑しいこの世を軽蔑し、天国に向わせるのか。

10

しかし、なぜ汝は地上に留まらなかったのか。神が愛する無垢で、われらを祝福するために。罪ゆえにわれらの敵となったお方の、怒りを和らげるために。急ぎ押しよせる害毒をそらし、あるいは、殺りくを招くペストを追い払い、

当然受けるべき苦悩を、われらから阻むために。

しかし、今いる所で汝はその務めを善く果たしうる。

11

だから、あなた、こんなにかわいい子の母よ、子供を亡くしたと想って、嘆くのはおやめなさい。

激しい悲しみを抑えることを学びなさい。

なんと立派な贈り物を、神に捧げたかを思い、神が貸したものを、我慢して神に返しなさい。

そうすれば、世界の果てまで、あなたの名を残す子孫を、神が授けるでしょう。

1

美しい幼な子とは、ミルトンの姉 Anne とその夫 Edward Phillips の長女 Anne のことである。彼女は1626年1月に洗礼を受け、1628年1月に埋葬された。2歳であった。叔父にあたるミルトンは19歳であった。

前回紹介したラテン語の追悼詩²⁾と比較しながら、まずは死神について考えたい。以前取りあげた4人の犠牲者、すなわち、ケンブリッジ大学の儀式の担当者、Winchester の主教、Ely の主教、そして医学の教授はいずれも男性であった。彼等を襲った死神は「墓を支配する女王」、

「黄泉の国の侍女」、「死者をつかさどる女神」、「運命の女神」、「地獄の女王」などと呼ばれているように、一方的に死者(男性)を連れ去るような、権力を持った女性であった。彼女たちの性質は無情(ruthless Death)で嫉妬深く(Envious Goddess) 怒りっぽい(angry Persephone)。さらに、弓矢や大鎌を手にした、おどろおどろしい女神として描かれていた。

今回、美しい幼な子を連れ去った死神は冬將軍である。冬將軍が幼な子にキスしようとして、さらには冷たい抱擁によって、風邪をひかせてしまい、その風邪が原因で、子供は亡くなったのである。そもそも冬將軍は彼女を妻にしようと、もくろんでいたのだった。死神(男性)が美しい女性に恋をするという図式は、『ロミオとジュリエット』にも見られる。墓所に横たわっているジュリエットに向ってロミオは嘆く。

ああ、ジュリエット、

なにゆえおまえはまだ美しい？うつろなはずの

死神までがおまえに恋心を燃やしているのか？あのやせこけたいとわしい化け物めが、この暗闇におまえを愛人として囲っておこうとするのか？

(第5幕第3場)

ジュリエット VS 死神=美人 VS 怪物という関係は十分に不気味であるが、幼な子 VS 老齡の死神という関係においては、緊張感はうすれる。しかも、死神は神としての誇りの為に、花嫁を求めたのである。彼の愛は不器用であり、その姿は淋しげで、滑稽でさえある。

彼に較べれば、女性の死神たちは、なんと残酷で堂々としていることだろう。墓、黄泉の国、死者たち、そして地獄の支配者たる彼女たちから見れば、冬神様(Winter)など吹けば飛ぶような存在である。死神にたいする詩人の意識は、なぜこれほどまでに違うのであろうか。疫病にたいするミルトンの怒りが、このような死神像を作りあげたのだろうか。あるいは疫病と死神(女性)は伝統的に親近性をもって描かれるものなのか。いずれにしろ、疫病を司る死神の方が恐怖に満ち、スケールの大きい破壊力で迫ってくる。Daniel Defoe(1660?—1731)によ

って書かれたルポタージュは、ペスト流行下のロンドンの現実を冷静に映し出している。もっとも、時は流れて、40年後の1665年のロンドンではあるけれども。

ロンドンに涙にかきくれているといってもよかった。…死を悼む声は街々に響いていた。道を歩いていると、最愛の家族が息をひきとろうとしているか、ひきとったばかりなのだろう、家の窓や戸口から、女性や子供の悲鳴が聞こえてくることもしばしばあった。どんなに情がない人間でも、それを聞けば胸がはりさけそうになる声だった。流行の初期には、涙と悲嘆は死者が出たどの家でも見られた。

ところが、あとになると、あまりにも目の前で人がばたばた死にすぎたせいで、市民の感情はすっかり麻痺し、近親を失ってもたいして悲しまなくなってしまう。次に召されるのは自分だなど思うだけになっていたのだ³⁾。

2

以上、死神についての描写を、ラテン語の追悼詩の場合と比較しつつ検討してきたのであるが、つぎに詩人が幼な子 Anne をどのように描いているか観察したい。

Anne は「いと美しき花」(fairest flower)として紹介され、「季節はずれに萎れゆく桜草」(primrose fading timelessly)に譬えられる。ギリシャの pastral elegy の伝統によれば、「みるみる萎れゆくバラ」(quickly fading rose)は追悼の詩に用いられるシンボルであり、若いアドニスの血から咲いた桜草は、人生の盛りを見ずして散った人々の永遠の表徴である⁴⁾。第1節において、単に人格化されただけで登場した冬神(Winter)は、第2節においては、北風(Aquilo)がアテネの王女と略奪結婚したというエピソードから類推されるように、神話における正当な冬神の地位を獲得する。したがって、Anne も美しい花から、Allen も指摘しているが、アテネの王女に昇格する⁵⁾。

第1節から第3節はギリシャの古典的伝統によって結ばれ、アイデアにも統一が見られる。ここでも、ギリシャの神々の権高な姿勢と好色的側面が強調されている。第3節の「氷の真珠

の馬車」(icy-pearled car)と「ふわふわ雪の馬車」(snow-soft chair)には、子供にふさわしい、かわいらしいイメージがある。

第4節においては、アポロ神の投げた円盤にあたって事故死したヒアシンサスの話が紹介される。Anne は亡くなったけれども、アポロ神に愛されたヒアシンサスに譬えられて、名誉なことだという論理が生まれる。

第5節の Anne が「蛆虫の床」(wormy bed)に横たわるという情景、言いかえれば、美と醜が共存するイメージ、あるいは美が醜によって侵されるイメージは、ふたたび、『ロミオとジュリエット』の墓の場面を連想させる。ロミオはジュリエットの傍を離れないと誓う。「ここに、ここにいるぞ、おまえの侍女の蛆虫と。」(Here, here, will I remain / With worms that are thy chambermaids.)⁶⁾。

「一つの真実には、それと等しい、そしてそれと反対の真実がある⁷⁾」というのが John Donne の好んだ metaphysical な conceits (技巧をこらした表現)であるならば、この美と醜のイメージは metaphysical なイメージであるといえよう。これとは少し視点を異にするのであるが、ここで問題にしている第5節のはじめの4行について、ミルトンは、幼な子の美しさと腐食、腐敗と不滅を同時に述べるという metaphysical な逆説を使っている、と Roscelli は言う⁸⁾。そうして、この詩行と George Herbert の *Death* を比較して

To be sure, Herbert's concept is worked out in more elaborate detail than is Milton's, but both poets are intent upon demonstrating the dichotomous nature of death. Further, both refrain from making their point by means of the traditional distinction between body and soul as the corruptible and incorruptible principles; they prefer to focus upon the enigmatic power of death which makes corruption and incorruption coeval.⁹⁾

と述べている。すなわち、二人の詩人は共通して、(1)死の二つに分かれた性質を示し、(2)身体は朽ちるもので魂は不朽のもの、という伝統的

な分け方を選ばずに(3)朽ちることと朽ちないことを同じ時間に進行させる、死の謎の力に焦点を合わせた、と Roscelli は説明している。

第5節の最後の2行で、幼な子が神性を帯びていることが暗示され、不滅の存在であることが明らかにされる。神話における不滅の存在であるのか、キリスト教におけるそれなのか曖昧ではあるが、いずれにしろ、この時点で、Anne は Apollo によって紫の花に変身させられたヒアシンサスを超越したと言える。第5節の曖昧さは第6節に受けつがれて、明確な質問を生む。すなわち、Anne の魂は天使の住みかである「最高天」(high first-moving sphere) = キリスト教的世界にいるのか、あるいは「至福の地」(the Elysian fields) にいるのか。ここでいう至福の地は、プラトンの説にもとづいたもので、清浄に節度正しくその生を送った魂が、神々の案内によって連れていかれて住む場所¹⁰⁾のことで、それは明らかにギリシャ的世界である。

第7節においては、神話の領域の疑問が二つ示される。幼な子は、地上に落ちてきた、天上の星ではないのか、あるいは、神々を襲撃しようとした巨人族から、地上へ逃げてきた女神ではないのか、という疑問である。

第8節においては、三人の女神が出現する。正義と恵みと真理の女神である。このうち、正義はギリシャ出身の女神¹¹⁾。恵みと真理の女神は、ギリシャ思想にもキリスト教思想にも共通のものであって、抽象名詞が寓話的に人格化されたものであるという¹²⁾。

第7節で問われた疑問——幼な子の魂は、キリスト教世界とギリシャ世界のいずれに属するのか——は、第8節における推理を経て、ようやく第9節において解決を見る。幼な子は、地上に降りた「黄金の翼を持つ天使」(the golden-winged host) であった。黄金の翼が、天使の階級の中でも最高の位にいることを示している。彼女の動機は、人間が汚れた現世を軽んじ、清らかな天国をお手本とするよう教えることであった。

第9節から第10節にかけて、詩は一気にキリスト教世界へと駆けあがる。あたかも詩人は、幼な子を最高位の天使にしたぐらいでは物足り

ないかのように、「アダムの犯した罪の為に、立腹している神を慰めよ(3行目)とか、人類の苦悩を人類に代って引き受けよ(6行目)、と幼な子に懇願する。これらの役目は元来キリストのものである。Anne のような幼な子には過剰な要求と思われるが、とにかく、ここで Anne はキリストに譬えられたと言えるであろう。そうして、同時に、ここが *Fair Infant* のクライマックスであろう。第10節の思想は、非常に圧縮された重いものであった。それと同じ次元において、ペストが治まることを詩人は願っている。事のゆゆしさと時代性が現われていて興味深い。

第10節における、燃えるような、張りつめた雰囲気醒ますように、第11節は穏やかに描かれている。最後は Anne の母である、詩人の姉にたいする慰めの言葉で終わっている。

3

以上、スタンザ(節)に従って、主として *Fair Infant* のイメージについて論じてきたのであるが、ここで、ラテン語で書かれた追悼詩のイメージと比較しつつ、*Fair Infant* についての結論を述べることにする。

ラテン語の追悼詩においては、死の世界から天国に至る過程が明確に描かれ、死の世界にも天国にも、それなりの統一が見られた。すなわち、大学の儀式担当者と医学の教授に捧げられた追悼詩には、古典的イメージのみが用いられ、Winchester と Ely の二人の司教に手向けられた詩には、古典的イメージとキリスト教的イメージが共存していた。これら2種類のイメージが相対する関係になったり、互いに助けあう関係になったりして、詩が完結に向うのである。生前の世界は、主に故人の職業にもとづいて創られていた。

それに比較すれば、*Fair Infant* は複雑きわまりないと言える。ギリシャ的イメージとキリスト教的イメージが錯綜し、最後には、キリスト教的世界が勝利を治めるだろうと、読者に想像させつつも、なかなか素直にキリスト教的世界に到達しないのである。Anne には、まだ個性もなく、現実世界の経験も、ましてや職業もないのであるから、詩人はすべてを創らねばなら

なかった。言いかえれば、彼女を自由に変身させることができた。

さらに、ミルトンにとって、*Fair Infant* は、英語で書いた最初の詩行である。若い詩人が野心的になるのも当然であろう。神話とキリスト教の思想を駆使し、プラトン、シェイクスピア、ダンをも利用した。彼は、詩作におけるさまざまな可能性を試しているようだ。それゆえ、*Fair Infant* にはすべての要素がある。非常に華麗で、バロック的な作品であると言えよう。

しかしながら、詩的統一は、わかりにくいながらも確実に存在する。Anne は、ほとんどスタンザごとに変身してゆく。たとえば、ギリシャ的世界においては、自然の花→アテネの王女→アポロ神の友人→天の霊→天の星、あるいは、女神→正義、恵み、真理の女神、というふうな。また、キリスト教的世界においては、恵み、真理の女

神→最高位の天使→キリスト、というふうな。いずれも低い階級から高い階級へと昇っていく。その変化の差はとても微妙であって、詩人はその工夫を楽しんでいたと想われる。

最後に、ラテン語の追悼詩と *Fair Infant* の違いについての Maclean の見解を紹介したい。すなわち、ラテン詩においては中心人物はいったん天国に受け入れられたあとは、人類の為にさらに何かをすることは考えられていない。たとえば、Winchester の主教は、下界の苦勞を忘れて神の国の至福を楽しみなさい、と天使にねぎらわれる。Ely の主教も天国までの宇宙旅行を楽しんでいる。しかるに、この幼な子は、地上の人類の為に、とりなしをする行動的代理人となっている¹³⁾。*Fair Infant* においては、天国がより深く描かれるようになったと言えようか。

文 献

- 1) 以後 *Fair Infant* と略する。
- 2) 武村早苗 (1994) ミルトンにおける死(1)。川崎医療福祉学会誌, 4(1), 87-92.
- 3) Defoe Daniel, 栗本慎一郎訳 (1994) ロンドン・ベストの恐怖。小学館, 東京, pp26.
- 4) Allen Don Cameron (1954) *The Harmonious Vision*, The Johns Hopkins Press, Baltimore, pp48.
- 5) *Ibid.*, pp49.
- 6) ロミオとジュリエット。第5幕第3場。
- 7) Warnke Frank (1961) European Metaphysical Poetry. In : Roscelli John William (1967) *The Metaphysical Milton. Texas Studies in Literature and Language*, 8, 464.
- 8) *Ibid.*, 472.
- 9) *Ibid.*, 473.
- 10) プラトン, 藤沢令夫訳 パイドン。世界文学全集14, 筑摩書房, 東京, pp106-109.
- 11) オイディウス, 中村善也訳 (1981) 変身物語(上)。岩波書店, 東京, pp17.
- 12) *The Harmonious Vision*, pp51.
- 13) Maclean N. Hugh (1957) Milton's *Fair Infant*. *A Journal of English Literary History*, 24, 303.